

神楽の魅力

神楽は、日本神話(※1)の神様にささげる歌や踊りです。この神楽は豊作・豊漁を願い、疫病を追い払う儀式として舞われたのが始まりとされています。

日本国内で様々な神楽が伝承されていますが、中国地方では神楽上演団体(※2)は数多く全国トップクラスです。地域ごとに包括しても「出雲神楽」、「石見神楽」、「芸北神楽」、「備中神楽」などがあります。

趣についても、ゆったりと神事性が高いものから、太鼓や笛のリズムのテンポ(※3)に合わせ、華麗に舞う舞い手(※4)の姿に圧倒される演出性が高いものまで幅が広いです。

ストーリーを伴うものについては大半が「勧善懲悪」を主とした内容となっています。上演場所も様々であり、神社で厳かに舞うものもあれば、常設会場などで飲食を楽しみながら和気あいあいと鑑賞するものまであり、訪れた方々は神楽の魅力に惹かれ、多くのリピーターを生み出しています。

(※1) 8世紀初頭に編纂(へんさん)された「古事記」や「日本書紀」をはじめとする古典に記された神話のことです。その中に登場してくる神様の中で、天照大御神(あまてらすおおみかみ)、須佐之男命(すさのおのみこと)、天鈿女命(あめのうずめのみこと)などは神楽の演目の主人公となることもあります。

(※2) 「神楽団」や「社」と呼ばれています。通常、構成員は別の本業に従事しながらその合間をぬって稽古を行い完成度の高い演舞を披露しています。

(※3) 神楽で欠かすことが出来ないのが奏楽です。奏楽の種類としては大太鼓・小太鼓・横笛・銅拍子(手打ち鉦)があり、中でも欠かせないのが太鼓です。神楽には楽譜がないため、他の演奏者は大太鼓の流れに合わせて演奏をすることが多く、舞い手との阿吽の呼吸も要求される奏者は日頃の鍛錬と熟練の技術が求められます。



(※4) 神楽の要素として舞い手が舞台上に一部始終登場していることが挙げられます。それぞれの演目により舞い手のお面・衣装が異なります。演舞によりますが、時には華麗に、時には激しい動きで舞い、多くの観客を魅了します。舞い手の中には「追っかけ」が存在するほどの人気スターもいます。神楽が「日本のオペラ」とも称されるゆえんです。

神楽のここが面白い

神楽には様々な演出があり、それぞれ見どころがあります。ここではその一部をご紹介します。

【一舞手が炎を噴く一】

神楽の見どころの一つで、神と鬼が戦う場面があり、その際に突然口から炎に見立てた火花を発する演出を行う演目もあります。特に夜の屋外公演の際に行われる演出の一つとして多くの神楽ファンを魅了しています。



【一ドライアイスを用いた演出一】

演出の一つとして良くドライアイスが用いられます。演目にもより、鬼の登場とともに舞台裏からもくもくと白い気体が出てくるケースが大半ですが、雲をイメージとして使用される場合もあります。見ている側は「今から何がおこるのだろうか?」とドキドキする瞬間です。



【一神楽の早技一】

神楽を見ていると、突然舞い手の衣装が替わっていたり、今までつけていなかったお面をつけていたりする場面が多くあります。一瞬の内に替わる舞い手の技量に観客は驚かされます。



【一まるで漫才?一】

演目によりますが、舞い手には茶利(さり)と呼ばれる役があります。いわゆる芝居で言う「三枚目」のことです。とてもユーモアがある話術と素振で太鼓奏者との掛け合いは観客を笑いの渦に巻き込み、あたかも漫才のようです。